



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<話題提供>地域をともにつくる学校の先生になる : 学校外との連携で教員は育つ
Author(s)	宮前, 耕史
Citation	北海道大学教職課程年報, 9, 25-41
Issue Date	2019-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75245
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_2185-9809_9.pdf



<話題提供>

地域をともにつくる学校の先生になる—学校外との連携で教員は育つ

宮前 耕史

はじめに

皆様、こんにちは。北海道教育大学釧路校からまいりました宮前と申します。よろしくお願ひします。「地域をともにつくる学校の先生になる」という標題で、今日はお話をさせていただきます。「学校外との連携で教員は育つ」というサブタイトルをつけておりますけども、最初にいただいたお題が実はこういっただお題で、今日はこのようなテーマでお話をさせていただければと思ひます。

内容についてですけれど、まずは「地域をともにつくる学校の先生」とは何かということと、なぜそういう先生が必要なのかということ。その上で、ではそういった先生が必要だとして、どのようにそれを育てていくのかということについて、「地域をともにつくる学校の先生」を養成するための取り組みということで、釧路で私がかかわらせていただいている取り組みを二つ、「うらほろスタイルプロジェクト」と「教育フィールド研究7—根室酪農泊体験実習」についてご紹介させていただきます。

かなり長大な資料を用意させていただきましたが、これを全部お話しさせていただくということではなく、飛ばすことを前提に作成させていただいたものなので、かなり急ぎ足になりますけれども、どうぞよろしくお願ひいたします。

1. 「地域をともにつくる学校の先生」とは何か

まず「地域をともにつくる学校の先生」とは何かということですが、似たような言葉で「地域とともにある学校」あるいは「地域とともにある学校づくり」というような、こういう言葉はお聞きになったことあると思ひます。実は私、この言葉に、理念としてはすごく分かって賛同もしながらも、何かずっと違和感のようなものを感じてまいりました。それが1年ぐらい前に、ふとした瞬間にずっと抱いていたその違和感の謎が解け、自分でなるほどと思ひました。

どういうことかといいますと、「地域とともにある学校」という言葉は、何かとても投げやりで無責任な気がするのですね。つまり、「さあ、学校は地域に開きましたよ。学校は地域とともにあります。ではあとは地域の皆さんにお任せしますので、何とかしてください」というような、そういった学校中心の上から目線の世界観が透けて見えるような気がします。それともう一点、言うだけ、口だけなら何とでも言うことができますよね。もっと言うてしまえば、学校が学校づくりをするのは当たり前であって、例えば「学校を核とした地域づくり」を学校がしますよと言ったら、これはすごいなということになりますけれども、学校が学校づくりをするのは当たり前でしょう。なぜ学校が学校づくりするのがそんな偉いのかといった、そういった感覚を私は持ちました。

それに対して「地域をともにつくる学校」という言葉、実はこの言葉は平成17年に出版された『地域をともにつくる子どもたち—子どもの瞳が輝く授業 茨城県長倉小学校での2年間の実践記録』という本の中に

ありまして（大木・鈴木・藤井 2005）、それにもまた元ネタがあります。愛知県の安城学園高校というところの校長先生が書かれた著述の中で、こんなふうにおっしゃっているそうです。

よくいわれる「地域とともにつくる」という言葉では、学園がどうしても主役になってしまいます。現在の子どもたちを取り巻く社会を考えたとき、「地域をともに作る」という一歩踏み込んだ姿勢が、学校の教職員に必要なということです（坂田 2002）。

これを読んだときに、私はこれだと思ひまして、実は私の研究室の Facebook も「地域をともにつくる学校の先生になる」といった標題で作らせてもらっています（地域をともにつくる学校の先生になる—北海道教育大学釧路校「うらほろスタイル」プロジェクト（地域文化研究室））。

2. なぜ今「地域をともにつくる学校の先生」なのか。

次になぜ今「地域をともにつくる学校の先生」なのかということなのですが、北村所長のお話の繰り返しになってしまいますが、そういった課題意識が札幌では共有されているのかと思うと、かなり先に進んでいるんだなと焦ったりしてしまうところもありますが、なぜかというところ、たとえば教育免許状更新講習だとか社会教育主事講習、あるいは学校の先生方に向けて話す時に、このあたり、なぜ地域との連携や協働のようなどころが必要なのかということ、そのあたりのベースになるところの課題意識を共有してからでないと、話が通じないです。なので、消滅可能性自治体であるとか、北海道の人口問題などということもお話するのですが、そうした課題があった上でのそれを解決するための「社会に開かれた教育課程」ということになるわけです。何のための「社会に開かれた教育課程」なのか、ということです。

これは平成 27 年 12 月に手交された中教審答申をまとめた「『次世代の学校・地域』創生プラン」—通称「馳プラン」から引っ張ってきたスライドですけれど、本丸はここ、右上隅にある「地域創生」です（【図 1】）。地域創生に向けてこそその「地域と学校の連携・協働」なのであって、そのための仕組みとしてのコミュニティ・スクールであったり、地域学校協働本部であったりするわけです。それに対応するかたちで、学校は「社会に開かれた教育課程」でなければならないのであって、このような方向性での学校・地域の連携・協働を進めるための教員の意識改革としての一番左側の教員改革という構図です。中教審答申、平成 27 年 12 月に 3 本が一度に手交されていますけれども、私はそういうふうに理解しています。

研究史的には、「村を捨てる学力」ではなくて「村を育てる学力」だ（東井 1957）、あるいは「地域を捨てる学力」ではなく「地域で生き、地域をつくる学力」だということが言われてきた中で（太田 2010）、私どもも実は「地域創造型」というような、新しいタイプの「地域に根差した」教師像を提案させていただいています。学校を地域資源と位置づけて、学校の地域に対する奉仕・貢献を志向する。学校中心、学校のための地域連携ではなくて、地域中心、地域のための地域連携を進め、地域の持続可能性や創造性を追究する。「地域創造型教師」というような類型を立てまして、本も出版させていただきました（【図 2】）（宮前・平岡・安井・添田 2017）。

という中で、実はまずは高等学校からということで、地方創生に資する高等学校改革というものが既にもう始まっております（【図 3】）。文科省のホームページには、島根、長野、飯田の取り組みの例が具体的

に挙げられ掲載されています。そういった学校と地域の連携・協働のあり方を、今は高等学校がベースになっていますけれども、それが小・中・高等学校そして大学まで接続しながら各段階において実現し、地域人材を育成しなさいと。また、そういった必要性があることを、各地において大学が中心となり地域に知らせていきなさいというプロジェクトが文科省のミッションとしてあります。これはそのプロジェクトにかかり、文科省の方で作ったスライドです（【図4】）。そういった中で、私たちも実は2週間ほど前、こういったフォーラムを釧路で開催させていただきました（【図5】）（宮前・浦崎・室・幸村・立野・半澤・道東の地域教育をつくる会2019）。

支援から協働へなどと言われますけれども、何のための協働なのかということは、なかなか誰も言って来ていません。でも私が思うに、それは地方創生、地域課題解決のためなのです。持続可能な地域づくり、「地域をともにつくる」ためでしょうということが私の主張でありまして、そのためには「地域とともにある」ことを超えたところにある「地域をともにつくる」という学校・教師の新たな「地域に根差した」あり方が、絶対に必要なのだということが私の主張であります（【図6】）。

ただ、なかなか学生たちの実態を見ていると、「地域に根ざした」ということが釧路でもかなり大事なのだと言われながらも、北村所長のお話の中にもありましたけれども、学校の中でどう教師として立ち居振る舞うかということについては、学生たちはかなり一生懸命勉強します。でも、学校が置かれた地域がどういう状態にあるか、地域にはどんな地域課題があるかといったことには全くと言ってよいほど目を向けません。あるいは地域学習、ふるさと学習の大切さ、そういったことが叫ばれ、頭では何となくそういうことも分かっているはず。でも、なぜそれらが必要なのかということになると、とたんに分からなくなってしまいます（【図7】）。

3. 「地域創造型教師」養成の取り組み

(1) 「うらほろスタイル」プロジェクト

そういった状況の中で、新しいタイプの「地域に根ざした」先生を育てようと言っても、実はなかなか大変なのです。そのための取り組みとして、まず一つ目に「うらほろスタイルプロジェクト」、二つ目に、根室管内で行わせてもらっております「酪農家民泊体験実習」。この二つの取り組みを紹介させていただきます。

まず「うらほろスタイルプロジェクト」についてですけれども、「うらほろスタイル」というのは、正式名称を「うらほろスタイルふるさと作り計画」という、ある町の「まちづくり計画」の略称です。十勝郡浦幌町で推進されています。「子どもを軸」に「学校を舞台」に行われている、学校発の学校・地域の連携・協働による地域人材形成の取り組みです（【図8】）（宮前・平岡・安井・添田2017）。そのために小中一貫コミュニティ・スクールを導入しています。実は、この「うらほろスタイル」が平成27年12月の中教審答申のモデルにもつながってきておりまして、文部科学省から発行されている平成28年のコミュニティ・スクールのパンフレットには、浦幌町のコミュニティ・スクールが全国三つのモデル事例のうちの一つとして取り上げられております（文部科学省2016）。

「うらほろスタイルプロジェクト」というのは、こういった「うらほろスタイル」の取り組みから学ぶ、大学と浦幌町との連携による取り組みです。私が担当する研究室（地域文化研究室）の学生を中心に、釧路

校の地域・環境教育専攻の学生が、大体毎年20名から40名参加しております。先生の立場から「学校の中」だけでなく、子どもの立場、大人の立場、それから教師の立場と順を追って、それぞれの立場から「うらほろスタイル」の取り組みを追体験することで、将来、地域課題解決に教師として「学校の中」からどのようにかかわっていくことができるかを考える。学校の外での多様な他者との出会いや対話を通じて自分の得意を見つけ出し、教育専門職としてのアイデンティティを形成をしていくきっかけとしたいと。そういった意図で、地域をともに作る学校の先生を目指す学生たちの課題解決的なコミュニティ・ベースド・ラーニングといった、そのような位置付けで進めさせていただいております。

細かいところまであまり話す時間はないのですが、教員養成課程ですので、浦幌小学校での教育実習ということも実施させていただいております。そこで一番学んでもらいたいと思っているのは、先生たちの「地域に根差す」態度といいますか、そうしたもののなのですが、これは高橋康伸校長先生という、平成20年時点で浦幌中学校の校長先生だった先生の、あるところでの発言です（【図9】）。ちょっと長いものではしよらせてもらいますけれども、つまり何のための地域学習なのか、何のための学校地域連携なのかということに対して、こういうふうにおっしゃっておられます。

それは「地域と地域の発展のため」なのだ、と。学校は将来の「地域の担い手」を育てるところ。そのためにこそ学校・教師は「地域とともに」あるのであって、「地域で」「地域を」学ぶのだ、と。平成20年のことです。今からほぼ10年前のことですが、ここまではっきり学校地域連携の目的が「地域のため」なのだと言う先生を初めて知りました。これはすごいということで、さっそく連絡をとりおじゃまさせていただいて、そこから学生とともに学ばせてもらっているというところです。まさに「地域をともにつくる学校」の先進事例としての「うらほろスタイル」であるわけです。

これが「うらほろスタイル」プロジェクトの取り組みの全体像です（【図10】）。教員養成課程ですので、浦幌小学校で教育実習もさせていただいております（3年生2学期）。釧路校の場合、教育実習となりますと、道内の母校実習以外では釧路市内、あるいは釧路町・白糠町といった、どうしても近郊の町村でさせていただかなければならないということになってくるのですが、ある意味特例的な扱いをさせていただいて、十勝管内の浦幌小学校で教育実習をさせていただいております。教師として「学校の中」から「うらほろスタイル」に参加、体験させていただく教育実習が3年生の夏休みぐらいなのですが、そのほか授業作りに関する講義も、非常勤講師という形で浦幌町から先生方に来ていただいております（3年生2学期）。

けれども、学生たちにはいきなり「学校の中」に行くということはさせていません。なぜかという、うらほろスタイルでは、地域の人と学校の先生方とで目指す子ども像を共有した上で、では学校としてはこういうふうな取り組みをしましょうということで取り組んでいるわけです。ある意味、地域の方々の願いを学校の先生が学校の教育課程を使って実現しているということになるわけです。ですので学生としても、まずは地域の人々の願いを聞くのが最初だというふうに私は考えています。ですので、いきなり学校の中に行くということはさせていません。

というわけで、浦幌小学校では、小学校5年生の段階で地元の農林漁業家さんのお宅に1泊2日の民泊体験ということをしてしておりますが、まずは学生たちも、そこで子どもたちと同じ体験をさせていただきます。農林漁業家さんのお宅に、子どもたちと同じように民泊体験をさせたらうと。受け入れ先の農林漁業家さんたちは、浦幌町の子どもたちを受け入れている農林漁業家さんでもあります。浦幌の農林漁業家さんたちは、

なぜ子どもたちを受け入れるのか。また、なぜ将来先生を目指す私たちを受け入れてくれるか。そういったあたりのお話を聞きながら、1泊2日、民泊体験をしてくるわけです（2年生1学期）。

というところから始まって、あるいは地域の人たちと一緒に活動をしながらか地域の人たちの願いも知り（2年生2学期～3年生1学期）、その上で、教師として学校の中で「うらほろスタイル」を体験させていただく教育実習に臨むということになります。つまり、ここではじめて、地域の人たちの願いを受けて、学校の先生たちがどういう努力をされているかということ、つぶさに学校の中で体験させていただいて来るといのが、浦幌小学校での教育実習ということになるわけです（3年生2学期）。

というような過程を経て、卒業論文を書くということになります（4年生1学期～4年生2学期）。テーマとしては「学校・地域の連携・協働」「ふるさと学習」とか、あるいは「カリキュラム・マネジメント」「教科横断型学習」「地域課題解決型キャリア教育」というような、こういったテーマの卒業論文を書く学生が多いのですが、さすがに授業づくりであるとか教育課程というテーマになってくると、私は専門が全く違います。民俗学という、地域社会の文化的伝統といったところを研究するのが専門ですので、学生たちがこういったテーマで卒業論文を書きたいのだと言い出しますと、それはちょっと勉強できる先進的なところへ行って学んでおいでというような話をすると、東京なり島根なり新潟や山形なりといったところへ行って、学生たちは勝手に学んできてくれます。

学生たちの感想としては（【図11】）、学校は地域の中にあるのであって、子どもたちは地域の将来の担い手なのだ。子どもたちが地域について知ることは、地域に自信や誇り・愛着を持つために決定的に重要かつ必要であって、それが子どもたちの安心感、自己肯定感にもつながっていくのだとか、そのためには地域との連携・協働による体験活動を設けていく必要があり、教師自身もその地域との間に信頼関係を築いていくことが大切だと。それと、地域には子どものために行動する大人がいたのだということを知った、そしてそういう人たちと「子どもを軸」に連携・協働していくことで、学校は地域づくりの核になることができるのだということが分かったと。学校は地域資源としてあるのだということ、あるいは地域をともにつくる学校の先生としての目覚めといいますか、そういったものが読み取れるのではないかというふうに考えております。ちょっと字が細かくて申し訳ないのですが、学生たちの生の感想も読んでいただけましたらと思います（【図12】）。

そういった中で、卒業生の中から、先生にならずに浦幌町で学校地域、教育をつなぐ地域教育コーディネーターとして働きたいという学生も出てきておまして、今ではそういった学生たちが、学校と地域をつなぐだけでなく、地域と大学をつないでくれています。そういう役割も果たしてくれる、大変頼もしい存在になっております。

（2）教育フィールド研究Ⅶ—道東地域体験・根室酪農家民泊体験実習

次に、駆け足になりますけれども、「教育フィールド研究Ⅶ—道東地域体験・根室酪農家民泊体験実習」についてお話をさせていただきます。これは釧路校の3、4年生及び大学院生を対象に、だいたい定員が例年24名ということになっておりますけれども、「教育フィールド研究」という科目の一環として行っております。釧路校の教育実習委員会と根室地区農協青年部連絡協議会、それとJA北海道中央会根釧支所が事務局になりまして、株式会社ノースプロダクションにコーディネートをお願いさせていただくという三者連携で実

施しています。

例年5月末から6月初旬、金曜日から日曜日にかけての2泊3日の日程で、二人一組になって根室管内の酪農家さんのお宅に1泊2日で作業体験、民泊体験をさせていただいて、翌日から合宿形式で振り返りを全員で集まって行うということをやっております。食育指導力、実践力の向上を目指しながらも、「うらほろスタイルプロジェクト」における知見も生かしつつ、大学と地域の連携、あるいは大学の地域貢献のあり方としても新たな展開が見えてきているのではないかと考えております。

どうしても食育といいますと、栄養がどうだとか、「早寝早起き朝ごはん」だとかということになってくるように思うのですけれども、それだけではなく、命の糧である食というもの、あるいはそれを生み出す第一次産業や農山漁村の価値といったことを理解している先生、そういうことを教えることが大切なのではないかと、そういったことをきちんと理解している先生、これを育てることが釧路校の使命なのではないかという、そういった課題意識があります。

そして釧路校の「教育フィールド研究」という科目群、これが全体の体系図ですけれども（【図13】）、教員養成課程なので当然といえば当然なのですけれども、「現場」となる「フィールド」は全部学校です。学校基礎①、学校基礎②、学校応用、学校発展、介護等体験、特別支援とありますけれども、他にへき地・小規模校実習ですとか新入生研修という形でいわゆるへき地校、小規模校に出かけて行くこともあります。実習の行き先、「フィールド」（現場）となっているのはほぼすべて学校です。でも教育のフィールドは学校だけではないわけで、とてもバランスが悪いように私には見えました。なので、平成25年に酪農家民泊体実習という取り組みを立ち上げてもらって授業化したというような形で、今年（平成30年）で6年目となります。

実施体制とかスケジュール、こういった形で進めておまして（【図14】（【図15】）、シンポジウムなんかもやったり、その様子をまとめたりといったこともしています（近江・上田・玉井・安達・宮前・半澤2016）（添田・近江・神田・宮前・白鳥・梶2014）（半澤2017）（半澤2018）（半澤・宮前2015）（宮前・半澤・内山2015）（宮前・大森・半澤・近江・伊藤・佐々木・玉井2015）。皆さんのお手元に、この赤丸で囲んだパンフレットお配りしていると思いますけれども、これが最新のパンフレットということになります（【図16】）（北海道教育大学釧路校2018）。

学生・教員の学びや気づきを三つのキーワードでまとめさせていただきました（【図17】）。一つ目、命の糧・食や、酪農、第一次産業、農山漁村の価値を体験を通して実感した、こうした事柄が改めて身近・自分事になったと言います。二つ目、「命のつながり」が「食のつながり」であることが分かった。つながりの中で生き、自分がつながりの中で生かされていることが分かった。つながっていること、つなげてもらっていること、つながりへの感謝の念が芽生えたと。三つ目に、そうしたつながりを生み出してくれていたのが、実は農産漁村で第一次産業に従事されている方たちだった。そのことを知った。そしてそうした地域の人たちへの感謝、尊敬の念が芽生えたと。

そうした学びや気づきを学生たちは、「いただきます、ごちそうさまの本当の意味を知った」であるとか、「当たり前が当たり前でないということが分かった」というふうな言葉で表現します。そして、これらを実感することができた体験というものは、やはり重要だと。そしてその上で、これらすべてを伝え、つなげていくための先生、教師の専門性とは何だろうということを考え始めます。学生たちは、そうしたことを考えていくことが、教師を目指す私たちの「恩返し」なのだと言うわけです。これはおそらく、単なる酪農体験、

職業体験、あるいは農業体験ではない生活体験、民泊体験の成果、生活丸ごとを体験し、お話を伺う中で実感を伴って理解を深めるということの民泊体験の成果だと私は考えております。

こういった学校外の地域の人々との、この場合は生産者さんたちということになりますけれども、出会いや対話を通じて得られたこうした体験的な気づきが、「食料生産基地」北海道の地域社会の持続可能性の基盤になるものと私は確信しております。

おわりに

最後、まとめさせていただきます。取り組みを通じて気付いたこととして、何点が挙げさせていただきました（【図 18】）。

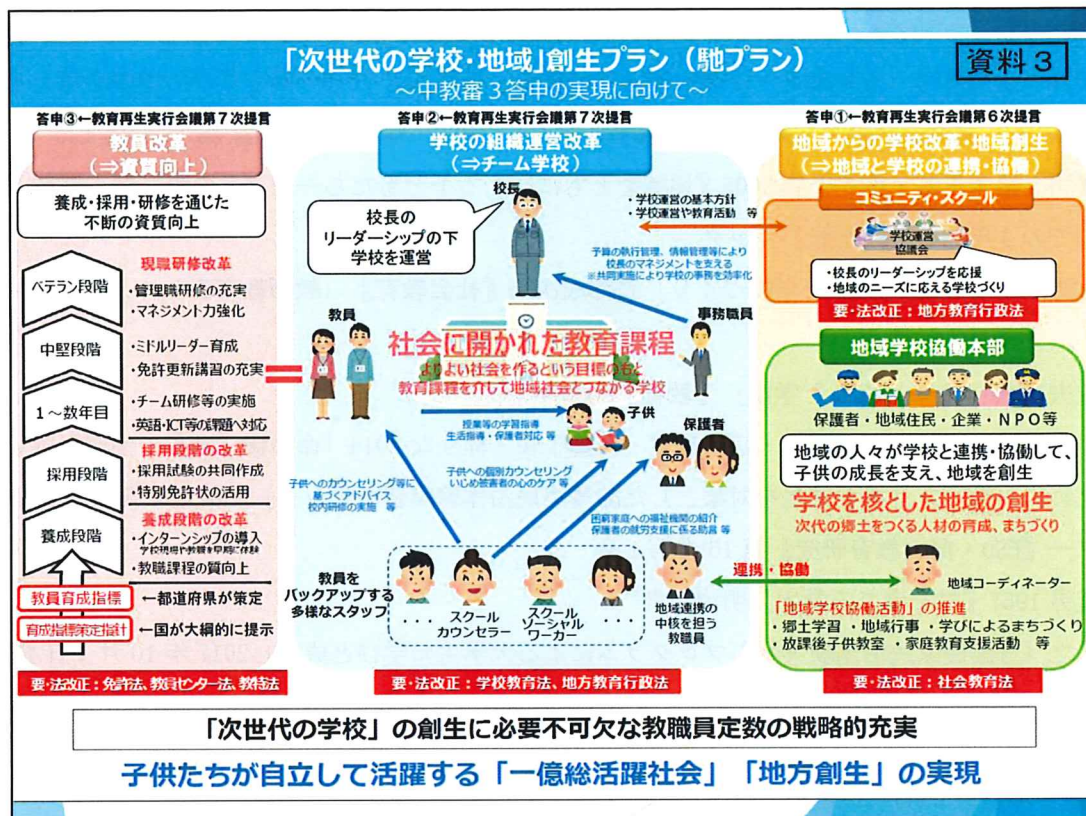
第一に、協働することのできる教師は、協働の中でしか育ちません。とりわけ学校の外の異質な他者との協働を通じて得られる他者に対する感謝・尊敬の念、リスペクトの気持ちがとても重要で、それは一方では自分にできないことであるとか、できない自分の発見でもあって、それはとてもつらい経験なのだと思います。でも、そういったできない自分や自分にはできないことの発見が、まずは他者の支援や援助・協力を求める行動へとつながっていきます。また、と同時に、自分にできないことはあるけれども、でも、もう一方では、では自分にできることは何だろうというふうに学生たちは探し始めます。考え始めます。そうして協働というものが相互補完関係、あるいは役割分担だということに気が付いていく。それが協働への基盤になっていくのではないだろうかと思えます。つまりこれを学校と地域の連携・協働ということに当てはめると、学校外の異質な他者との協働は、地域課題解決や持続可能な地域づくりに学校の中から貢献し得る自分の得意を見いだして、教育専門職としてのアイデンティティを形成していくきっかけになるのではなかろうかと思われるわけです。

というふうに考えますと、第二には、「社会に開かれた教育課程」を担うことをできる教員は、「社会に開かれた教員養成課程」の中でしか育たないだろうと思われるわけです。「社会に開かれた教育課程」の実現のためには、教員養成課程こそ「社会に開かれた」ものでなければならないのです。それともう一つ、地域連携担当教職員が大切だ、あるいは育てようと、中教審答申の中でも言われています。地域教育コーディネーターも必要だ、これも中教審の中で言われています。けれども、これらは個々ばらばらに教員養成課程は教員養成しかだめ、社会教育主事は、例えば社会教育主事養成課程の中で育てる、これではだめだということが分かるのです。両方がセット、学校と社会教育、学校教員と社会教育主事とが相互補完関係にあるとするならば、教員と地域教育コーディネーターとはセットで養成していかなければならないのであって、教員養成課程なのだから教員養成だけしていればよい、たとえば教員養成課程卒業生のうち70%以上は教員にならなければだめだみたいなことも言われるのですけれど、何を言っているのだというふうに思うわけです。地域連携担当教職員と地域教育コーディネーターとはセットでしか養成することができないだろうというふうな、そういった気づきも得ております（宮前 2017）。

以上、ちょっと駆け足となりました。時間もオーバーしてしまいましたけれども、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【参考文献等】

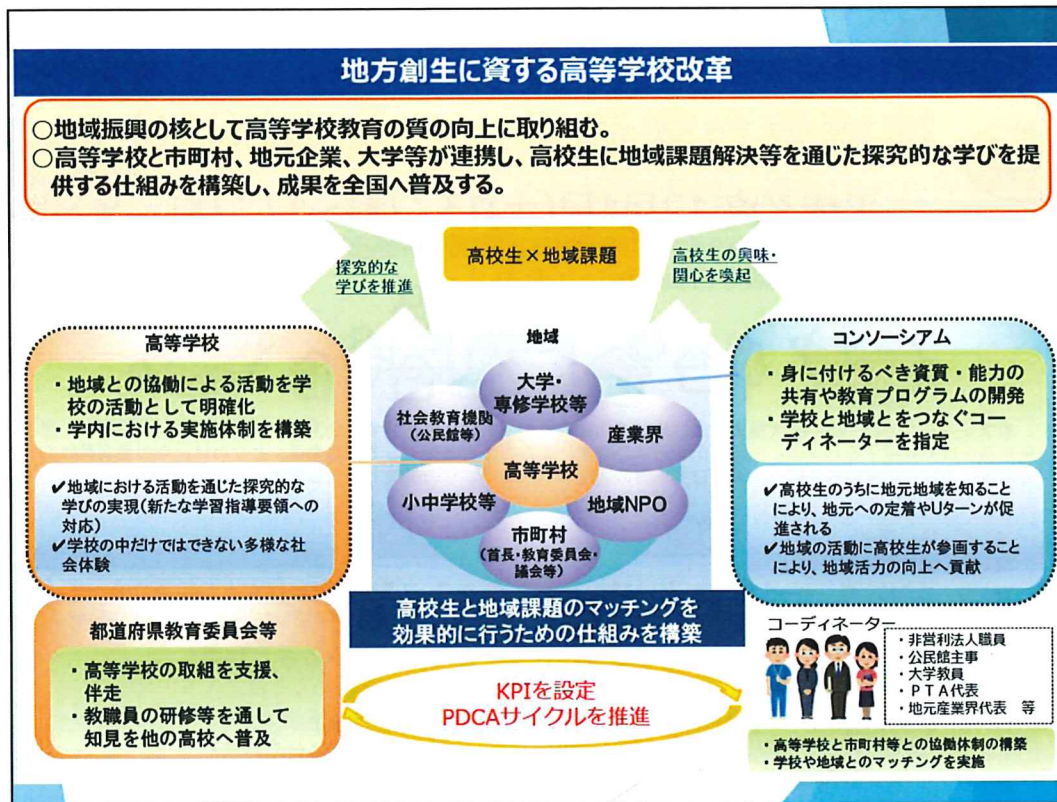
- ・近江正隆・上田真弓・玉井康之・安達永補・宮前耕史・半澤礼之 2016 「農と学びの連携を考えるフォーラム 2015in 根室」北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター『ESD・環境教育研究』第 18 巻第 1 号
- ・大木勝司・鈴木正氣・藤井千春 2005 『地域をともにつくる子どもたち—子どもの瞳が輝く授業 茨城県長倉小学校での 2 年間の実践記録』ルック
- ・太田政男 2010 「地域づくりと学校づくり」長澤成次編『社会教育』（教師教育テキストシリーズ 6）学文社
- ・坂田成夫 2002 「まちづくりと学校」『教育』No. 676
- ・添田祥史・近江正隆・神田房行・宮前耕史・白鳥千咲・梶りな 2014 「命の糧『食』の価値を感じ・考え・伝えるために—教師を目指す学生を対象とした酪農家民泊体験実習の試み—」北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター『ESD・環境教育研究』第 16 巻第 1 号
- ・東井義男 1957 『村を育てる学力』明治図書
- ・半澤礼之 「『酪農家民泊体験実習』プログラムによる大学生の学びと成長」2017 年 10 月、日本教育心理学会第 58 回総会シンポジウム
- ・半澤礼之・宮前耕史 2018 「酪農家民泊体験実習が大学生の将来展望形成に与える影響」2018 年 10 月、平成 30 年度日本教育大学協会研究集会
- ・半澤礼之・宮前耕史 「『酪農家民泊体験実習』プログラムを通じた大学生の知識構造の変化と将来展望形成」2015 年 9 月、日本教師教育学会第 25 回研究大会
- ・北海道教育大学釧路校 2018 『いのち・食・生きるに触れる 酪農家民泊体験実習 2017<教育フィールド研究VII>実施報告』（<http://www.hokkyodai.ac.jp/distinctive/research/project/rakunou.html>、平成 31 年 2 月 25 日最終確認）
- ・宮前耕史 2017 「教員養成課程における『地域連携担当教職員』（仮称）養成の可能性—『うらほろスタイル推進地域協議会』と連携した『地域創造型教師』養成の取り組みから見てきたこと—」『釧路論集』49
- ・宮前耕史・浦崎太郎・室貴由輝・幸村仁・立野里奈・半澤礼之・道東の地域教育をつくる会 2019 「地域教育創造フォーラム 2018」北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター『ESD・環境教育研究』第 21 巻第 1 号（予定）
- ・宮前耕史・大森享・半澤礼之・近江正隆・伊藤美実・佐々木貴子・玉井康之 2015 「命の糧『食』の価値を感じ・考え・伝えるために—教師を目指す学生を対象とした『酪農家民泊体験実習』の可能性—」北海道教育大学釧路校 ESD 推進センター『ESD・環境教育研究』第 17 巻第 1 号
- ・宮前耕史・半澤礼之・内山隆 2015 「『食育』指導力向上のための『酪農家民泊体験実習』プログラムの開発」2015 年 10 月、平成 27 年度日本教育大学協会研究集会
- ・宮前耕史・平岡俊一・安井智恵・添田祥史 2017 『持続可能な地域づくりと学校—地域創造型教師のために』ぎょうせい
- ・文部科学省 2016 『コミュニティ・スクール 2016』



【図1】「次世代の学校・地域」創生プラン（馳プラン）～中教審3答申の実現に向けて
文部科学省 HP (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/01/1366426.htm) 平成31年2月25日最終確認

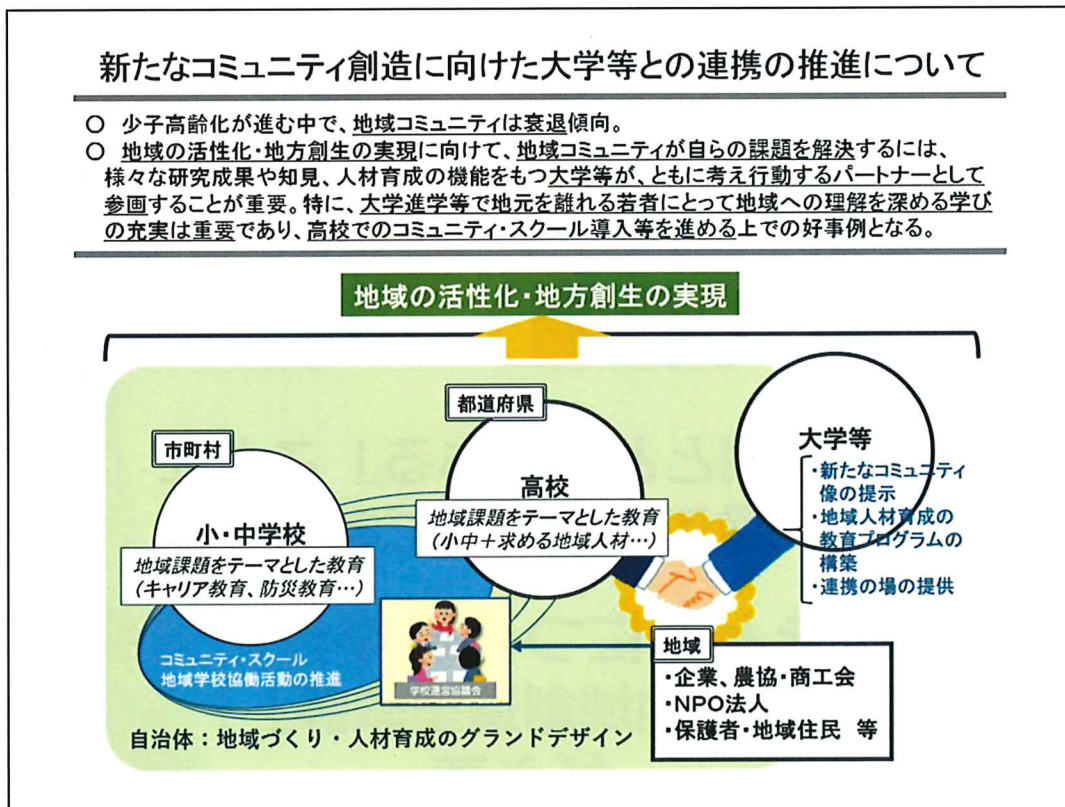


【図2】教師の「地域に根差した」あり方の3類型



【図 3】 地方創生に資する高等学校改革

文部科学省 HP (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1407659.htm) 平成 31 年 2 月 25 日最終確認



【図 4】 「新たなコミュニティ創造に向けた大学等との連携の推進について」 文部科学省 HP

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/suishin/detail/1405587.htm) 平成 31 年 2 月 25 日最終確認

地域教育創造フォーラム2018

平成30年12月1日(土)13:00~17:00
 会場：北海道教育大学釧路校503講義室（釧路市城山1-15-55）
 参加費：無料（平服でおこしく下さい）

本フォーラムでは、小中高大接続および地域連携による地域人材育成に関する全国的な動向や政策動向を知り、課題意識を広く共有すると同時に先進事例から学びます。またこのことを通して、北海道、とりわけ道東の個別具体的な地域における同種の取り組み、および関係者のネットワークづくりの契機といたします。

- 12:30 受付開始
- 13:00 開会式
- 13:10 基調講演「子どもの未来は誰が照らすのか？～道東の未来は大人の結束から～」
 浦崎太郎（大正大学地域構想研究所教授・前中央教育審議会学校地域協働部会専門委員）
- 14:20 事例紹介①「未来をつくる小中高連合・まちなかのふるさと教育」
 室貴由輝（岡山市立岡山後楽館高等学校教頭・やかげ小中高子ども連合共同代表）
- 15:00 事例紹介②「一般社団法人ラポールくしろの取り組み」
 幸村 仁（一般社団法人学校地域協働センターラポールくしろ代表理事）
- 15:30 ワークショップ
- 16:55 閉会式

※グラフィックレコーディング：立野里奈

【図5】地域教育創造フォーラム2018

地方創生・地域課題解決
 持続可能な地域づくり
 「地域をともにつくる」
 ため

支援（活用） → 協働へ

「地域とともにある」ことを
 超えたところにある

「地域をともにつくる学校の先生」
 （＝「地域創造型教師」）
 が必要

【図6】支援から協働へ—「地域創造型教師」の必要性

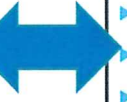
教員養成における課題意識

【学生たちの実態】

- ▶ 教師として教室や学校内でいかに立ち居振る舞うかには関心があるが、学校が置かれている地域そのものや地域課題には関心がない。
- ▶ 「地域学習（ふるさと学習）」や「地域連携」の大切さを理解・認識しながらも、なぜ「地域学習」「地域連携」なのか、目的や課題意識が明確でない。

【学校・地域関係】

- ▶ 「地域に根差した」教育・学校・教師
- ▶ 家庭・学校・地域の連携
学社連携
- ▶ 開かれた学校
- ▶ 地域とともにある学校
- ▶ 社会に開かれた教育課程



【原因】

- ▶ 「閉ざされた教育課程」の中で育ったため、「学校の外」を知らない。「学校の外」にも世界があり、人がいて、生活があることを知らない（「学校の中」にしか人はいないし、生活もない。仕事もない）。

【対処策】

- ▶ 知らないのであれば、してもらえばよい（直接的な「出会い」の場）。

【図 7】 教員養成における課題意識

④若者のしごと創造事業（H25（2013）～）

雇用創出WS（町民有志）・雇用創造事業検討会議（役場産業課）

⑤うらほろスタイル発展事業（H28（2016）～）

法人化・複合施設検討会議（高校生つながり発展事業等）（役場町づくり政策課）

【学校の中】 「将来も町に住み続けたい」 【学校の外】
（児童・生徒・教師）（地域に対する愛着・誇り）（地域のおとな）

①地域への愛着を育む事業

- うらほろスタイル教育推進会議（小・中学校担当教員、教頭・校長）
- 中学3年「総合一町おこし」（H19～）
- 小学校6年「修学旅行」（町のアピール）（H24～）
- 小学校5年「民泊体験」（H22～）
- その他、教科等の取り組み
- * 「地域のために、地域とともに」

③子どもの思い実現事業

- 子どもの思い実現WS（H25～）（町民・町出身者有志）
- 中学3年「総合一町おこし」企画実現

②農村つながり体験事業

- うらほろ子ども食のプロジェクト（推進会議民泊部会・町内農林漁業家）
- 民泊体験（小5「総合」）受け入れ

- ① 子どもを「将来の地域の担い手」と明確に位置付けて、そこに「地域に対する愛着・誇り」を育ていくことを目的とした「子どもを軸」とした「地域人材形成」の取り組み（＝地域づくり）。
- ② 町内全小中学校で9年間義務教育課程を貫き正規の教育課程で取り組まれる「学校を舞台」とした取り組み（＝地域づくりに学校が参画）
- ③ 子どもたちと直接かかわる教師が「地域のために、地域とともに」、地域づくりに対する課題意識・危機意識を共有しつつ参画する「学校発」の学校・地域連携（＝「地域をともにつくる学校」）

【図 8】 「うらほろスタイルふるさとづくり計画」の全体像

第1回「地域活性化案発表会」での 高橋康伸校長挨拶（平成20年3月）

地域に学ぶ学習でいうと、今までは、

○地域を学習の対象とする「ふるさとを学ぶ」という考え方

○地域を学習の場所とする「ふるさとで学ぶ」という考え方

の2つの考え方が多かったが、これからは

○地域をパートナーとする「ふるさととともに学ぶ」という考え方

○地域の発展を願う「ふるさとのために学ぶ」という考え方

を取り入れ、展開していくことが大切になってくると考えている。

地域の課題に学校の教育活動をしっかりと対応させることが、こ

れまで以上に求められる時代となってきたのは間違いない。

人は、ふるさとで生まれ、ふるさとで育ち、やがて、ふるさとを
育てる立場になる。それだけに、学校が果たす役割には限りなく
大きいものがある。教職員ともども、しっかり地域に学んでいきま
いと考えている（高橋康伸・元浦幌中学校校長）。

【図9】「地域のために、地域とともに」

「うらほろスタイル」プロジェクト

	1学期（4～8月）	2学期（10～2月）
2年	<ul style="list-style-type: none"> ○浦幌・「うらほろスタイル」を知る ○子どもの立場から 「うらほろスタイル」を体験 ○地域の人々の学校・教師に 対する期待を知る ・民泊体験/バスツアー ・協議会会長による講義・WS 	<ul style="list-style-type: none"> ○理論と実践の統合 ・上浦幌中学校・浦幌中学校 「総合的な学習の時間一町おこし」 企画（案）発表会見学 ・「うらほろスタイル教育推進会議」 座長による講義（学校の取組、 教師に必要な資質・能力とは？）
3年	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の大人の立場から 「うらほろスタイル」に参加・体験 ・「子どもの想い実現WS」参加・手伝い ex.「浦幌新聞」執筆、大学祭での「ウラパ チー」販売等 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師として学校の中から 「うらほろスタイル」に参加・体験 ・教育実習（浦幌小学校） ・「うらほろスタイル」による授業づくり に関する講義（浦小・上浦小教諭）
4年	<ul style="list-style-type: none"> ○進路決定・採用試験 ・教員/役場/団体職員（JA・消防等）/民間 ・「地域教育コーディネーター」、社会教育 	<ul style="list-style-type: none"> ○卒業論文 学校・地域の連携・協働、ふるさと学習、カリマネ、 教科横断型学習、地域課題解決キャリア教育

○【子ども】⇒【地域の大人】⇒【教師】それぞれの立場から「うらほろスタイル」に参画・体験、「地域の人々の学校・教師
に対する期待」を知ると同時に「そうした期待に応えるための教師の努力、資質・能力・専門性とは何か」を考える。
○「学校の中」で「子ども」や「先生」たちだけでなく、「学校の外」で多様な他者との出会い・対話を通じて、これからの学校・教師の役割につ
いて考え、教育専門職としてのアイデンティティを確立していく。
○新たな時代の「地域に根差した」教育・学校・教師像とはどのようなものか（＝「地域創造型」）、理論と実践の往還を通じて学生たちと共
有・発信・再構築していく、「地域をともにつくる学校の先生」を目指す学生たちのPBL/CBL。

【図10】「うらほろスタイル」プロジェクト

教育フィールド研究Ⅶ

(道東地域体験・根室酪農家民泊体験実習)

1年	前期		小規模校訪問 (新入生研修)	アカデミックスキル ②	学校体験
	後期			教育フィールド研究 Ⅰ(学校基礎)②	
2年	前期	基礎実習①	小規模校 体験実習Ⅰ	教育フィールド研究 Ⅱ(学校基礎)②	教育フィールド研究Ⅴ (介護等 体験実習) ② 6~1月
	後期			教育フィールド研究 Ⅲ(学校応用)②	
3年	前期	教育実習事前 事後指導① 教育実習④			教育フィールド研究Ⅵ (特別支援教育) ②
	後期		小規模校 体験実習Ⅱ	教育フィールド研究 Ⅳ(学校発展)②	教育フィールド研究Ⅵ (特別支援教育) ②
4年	前期	教育実習② 特別支援 教育 ③			教育フィールド研究Ⅶ (道東地域 体験) ②
	後期		小規模校 体験実習Ⅲ		教育フィールド研究Ⅶ (道東地域 体験) ②

教育フィールド研究Ⅰ～Ⅵ

(学校)

- ・Ⅰ (学校基礎①)
- ・Ⅱ (学校基礎②)
- ・Ⅲ (学校応用)
- ・Ⅳ (学校発展)
- ・Ⅴ (介護等体験)
- ・Ⅵ (特別支援教育)

* 学校体験・教育実習・小規模校体験実習

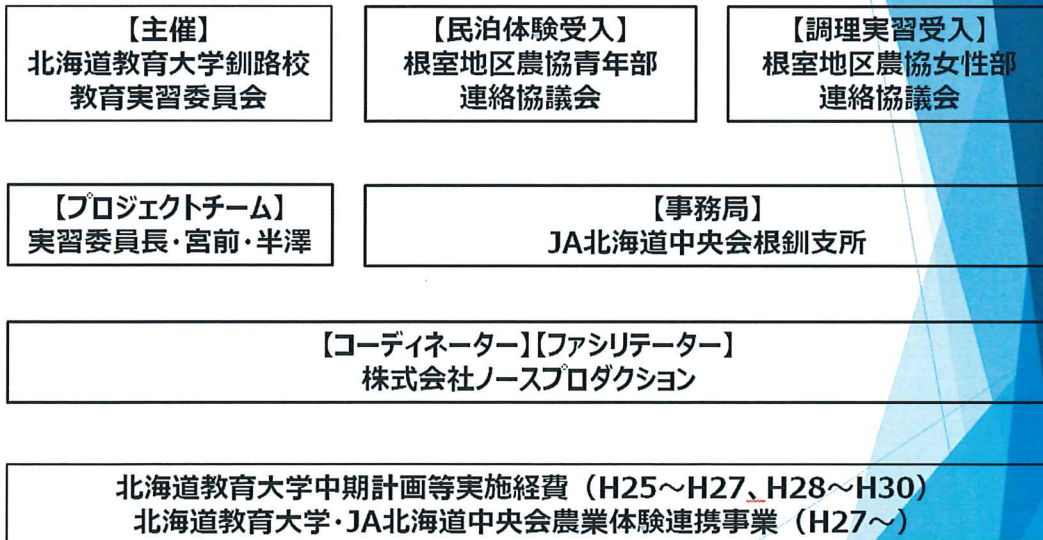


(地域)

- ・Ⅶ (道東地域体験・根室酪農家民泊体験実習) H25～

【図 13】 釧路校「教育フィールド研究」における「根室酪農家民泊体験実習」の位置付け

実施体制



【図 14】 「教育フィールド研究Ⅶ」の実施体制

スケジュール・参加者

時期	内容
4月	受講案内・受付・応募者多数の場合抽選（最大24名）
5月	ガイダンス（スケジュール説明・事前アンケート記入）
5月下旬 ～6月初旬 金・土・日	<p>酪農家民泊体験実習</p> <p>2泊3日 { (1泊2日)「民泊体験」 (1泊2日)「振り返り」+発表会</p> <p>○1年目（H25）5/31～6/2：40名（院6（留1））→19軒 ○2年目（H26）5/30～6/1：19名（院1（留1））→13軒 ○3年目（H27）5/29～5/31：24名（院3（留2））→14軒 ○4年目（H28）5/27～5/29：24名（院2）→12軒 ○5年目（H29）5/26～5/28：24名（院1）→12軒 ○6年目（H30）5/25～5/27：24名→12軒</p>
10～11月	成果・課題共有、事業普及のための報告会・学会発表
12～3月	報告書・パンフ作成、大学HP・FB掲載

【図 15】「教育フィールド研究VII」のスケジュールおよび参加者

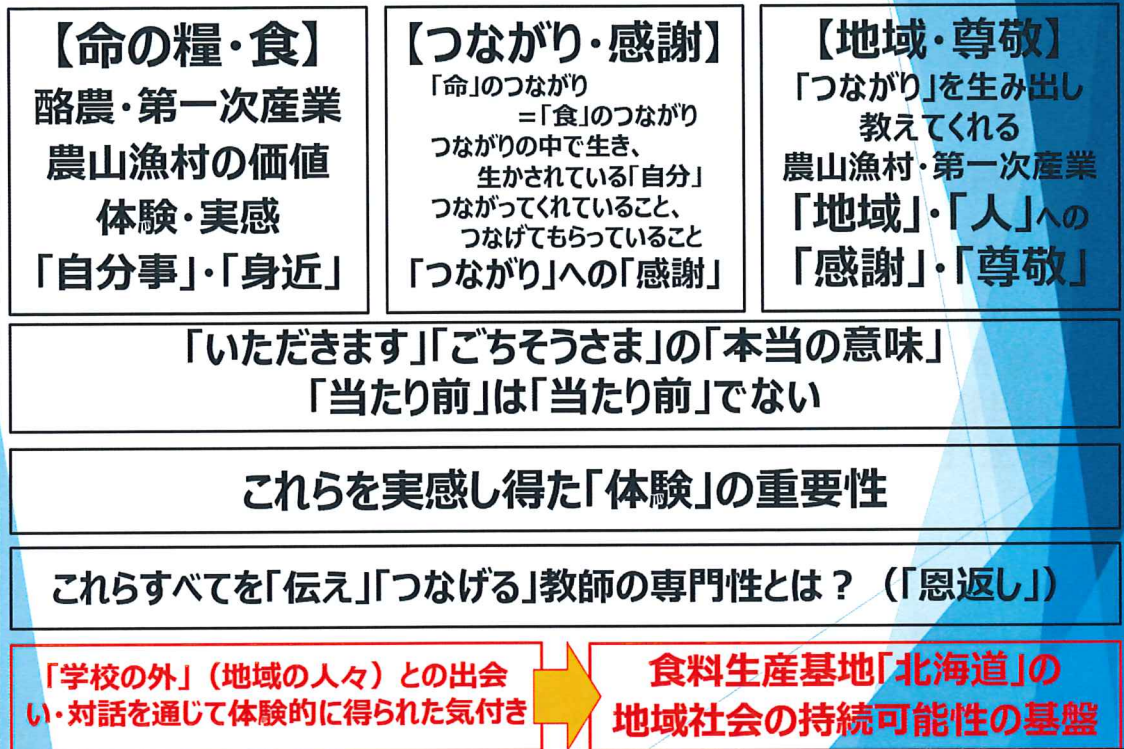
報告書・パンフレット作成



北海道教育大学HP「特色ある取り組み」→「学術研究」→「研究プロジェクト」→「酪農家民泊体験実習」
 (<http://www.hokkyodai.ac.jp/distinctive/research/project/rakunou.html>)

【図 16】報告書・パンフレット

成果（学生・教員の学び・気付き）



【図 17】成果（学生・教員の学び・気付き）

まとめ（取り組みを通じ気付いたこと）

- ▶ 「協働」（＝「地域をともにつくる」）することのできる教師（＝「地域創造型教師」）は、「協働」（＝「地域をともにつくる」）の中でしか育たない。
- ▶ とりわけ「学校の外」の（異質な）「他者」との「協働」（「出会い」や「対話」）を通じて得られる「他者」に対する「感謝」「尊敬」の念、「リスペクト」の気持ちが重要。
- ▶ それはもう一方では「自分にできないこと」や「できない自分」の発見でもあるが、それは他者の支援や援助を求める力や行動（＝「受援」）へとつながっていくと同時に、もう一方では「自分にもできること」を探すようになる。「協働」とは相互補完関係・役割分担であることに気付く。これが「協働」の基盤となっていく。
- ▶ 学校外の異質な他者との協働は、地域課題解決や持続可能な地域づくりに「学校の中」から貢献しうる「自分の得意」を見出し、教育専門職としてのアイデンティティを形成していくきっかけとなるものである。
- ▶ 「社会に開かれた教育課程」を担うことのできる教員は、「社会に開かれた教員養成課程」の中でしか育たない。教員養成課程こそ、「社会に開かれた」ものでなければならない。
- ▶ 「地域連携担当教職員」（仮称）と「地域教育コーディネーター」（社会教育主事・NPO職員等）は「セット」で養成していくことが好ましい。

【図 18】まとめ（取り組みを通じ気付いたこと）